

て1936～37年漁期72万6,120トンから1963～4年シーズンに1350トンに生産衰退をみたのに平行的な傾向がみられ、地理的分布が米国全沿岸からカナダ・バンクーバ島北端まで拡がっていたのが、カリフォルニア南の端末狭域にちぢまつた。日本のマイワシでも以前に似た衰退があつた。しかし研究の結果海況変化が影響したとみられた。ペルー・チリーでは比較的暖い水がマイワシ分布に影響する。1963年7月～12月北チリからカタクチワシの相対的消滅およびその斑点状の漁況が北チリ及びペルー沿岸で最近の月にみられている。ペルー沿岸で最悪の影響を受けた漁港の一つのチャンケイで、他の場所へ（サラグエリイ港に近いチカモあたり）10フィシユミール工場の移転を報ぜられた。カタクチ漁業について同研究所の下した結論というのは次の通りである。

- 1) 1964年の記録的漁獲量880万トンであつたが、水産業は既にカタクチワシ開発の極限に到達したとみる。
- 2) 連続的乱獲はストックを低下し、コストが増して、フィシユミールの価格が上らない以上は漁が不経済になるに到る。
- 3) 新しいフィシユミール工場設置は禁止すべきであり、現存工場は拡張してはならない。（法律で定められた。）
- 4) フィシユミール処理工場は原料のムダを減すようにすべきであり、より少ない魚からより多くの価値をひき出すようにすべきである。
- 5) 未成熟カタクチワシを余計に漁ることは中止すべきである。（立法化された）

この1966年禁漁措置は将来カタクチワシの産卵期とその他ストック評価に基いて2ヶ月以上に拡げるといふ噂もある。今回は1965年2月23日禁漁令が公告された。

（宇田 道隆）

## 6 カツオノエボシ（俗称電気クラゲ）

### の北上分布

1965年8月異常に大量のカツオノエボシ（Portuguese man-of-War Physalia physalis）が大西洋岸の米国ニューヨーク附近からバージニア州にかけて漂着した。この毒棘をもつ危険な熱帯海産のクラゲの一種はフロリダ州以北に大量に現われることは稀有のこととされる。日本近海でも1964、65年の夏季相模湾方面の海水浴場に大量に現われて新聞記事になつた。1930年代にもよく現われた。周期的大発生と暖流の北上優勢接岸（特に南寄りの風が吹走りに関係する）によるものとして、その指標生物的の意義をもつものであろう。ハリセンボン（バラフグ、ハリフグと俗称）の大量遊接岸も同様の意味で重要で記録に値する。

（例）—日本海洋学会誌

（宇田 道隆）